

佐田正晴先生を送る

東京医科歯科大学・難治疾患研究所・分子病態分野
木村 彰方

トゥルルー、トゥルルー 電話が鳴る。

「はい、木村です」との返答に被せて「あのさあ、キムちゃん・・・」と、名乗らずいきなり本題に入る声。そう、今も耳に残っている佐田先生からの電話である。

佐田先生が倒れられてから長く声をお聞きすることがなく、どうされているだろう、またお会いしたいなあと思っていたところに平成28年12月27日訃報が届き、ついに永遠のお別れとなってしまった。

佐田先生と初めてお会いしたのはいつだったろう。おそらく1989年頃だったのではないかと思うが、相澤幹先生、辻公美先生、笹月健彦先生が会長となって、1991年に第11回国際HLAワークショップを横浜で開催することが決まり、その準備委員会が横浜関内の貸会議室で行われていたので、その会議でお会いしたように記憶している。当時は佐田先生も私も30代だったが、年齢の割に落ち着いた風貌の佐田先生が、とても気さくな方であったことに驚いたものである。第11回国際HLAワークショップは日本のHLA研究者が全力をあげて取り組んだイベントであり、相澤先生、片桐一先生は北海道にいらっしゃったため頻繁にはお会いしなかったが、準備委員会では、辻先生、笹月先生以外にも柏木登先生、十字猛夫先生、関口進先生、吉田孝人先生などに定期的にお目にかかっていた。我々のひと世代上のHLA界の重鎮の多くは当時50代であったため、初対面の佐田先生もその方々と同じくらいに見えたが、その気さくさは私にとって結構なギャップであった。とは言え、猪子英俊先生、西村泰治先生、徳永勝士先生、小林賢先生とともに、日本のHLA界が世界と伍して行くことに嬉しくもあり、不安でもあった頃であるが、佐田先生は飄々としてやるべきことをやっていたように思う。

その後、佐田先生とは学会でお会いする程度の付き合いであったが、私が九州大学から東京医科歯科大学に移った1995年以来、HLA関連の講習会などでお会いすることが多くなった。なかでも佐田先生と親しくさせていただいたのは、ゴルフでの繋がりであった。私がゴルフを始めたのは佐田先生の勧めもあったが、佐田先生はプロを目指したというほどの上手さであった。初めてご一緒した二泊三日でのロッジに泊まるとのゴルフ三昧や、三泊四日で沖縄に出かけてのゴルフ三昧を始めとして、日本組織適合性学会メンバーにとって、佐田先生はゴルフの話題には欠かせない方であった。

私にとって、佐田先生との一番の思い出は、1998年に長野で開催された冬季オリンピックである。長野オリンピックのドーピング検査を信州大学が担当するとのことで、1997年の半ばくらいであったと思うが、太田正穂先生からボランティアで参加しないかとの打診があった。ドーピング検査の手順などはまったく知らなかったが、日本で行われるオリンピックでもあるし、どのようなことが行われるのかにも興味があったので、参加することとして研修を受けた。私は医師免許を有しているのでメディカルオフィサーとして、佐田先生はメディカルスタッフとして参加したが、私ども以外に、日本組織適合性学会の関係者では、猪子先生、小林先生、成瀬妙子先生、それに当時ベリタス社の社員であった大澤敬子さんが参加された。それぞれ競技ごとに分かれての参加となったが、佐田先生、成瀬先生、大澤さんとともに、私はアルペン競技で長野県白馬村の八方尾根スキー場の担当となった(写真1)。確か、猪子先生、小林先生はクロスカントリー競技で白馬村のスノーハープの担当であったと記憶している。

白馬でのボランティアでは、トイレと風呂が共用の和室の民宿(いわゆるスキー宿)に泊まったが、佐田先生と一緒に部屋で10日間を過ごした。吹雪くことも多かったため、午後からの競技に備えて午前中は部屋で待機し、当日の競技開催が決まれば、会場に設置されたプレハブのドーピング対応部屋に出勤し、競技が終わるごとに4位までの選手とランダムにピックアップされた数名の選手がドーピング検査スタッフに連れられてやって来るのを待って、対応するのが日課であった。しかし、我々の滞在中には天候不良で競技が開催されない日の方が多かった。競技の中止が決まるの

は通例昼頃であるため、その日はドーピング検査スタッフとしてすることがなく、午後からはスキーを楽しむことや、昼間から酒盛りしてたわいもないことで盛り上がったものである(写真2)。この10日間ずっと寝食をともにしたことで、佐田先生の人となりもよくわかり、その後ずっと親しくさせていただくことになった。

佐田先生は遊びの天才でもあったが、ものごとを体系的に整理して、周囲とともに新しい仕組みを作り上げる能力にも長けていたように思う。その典型的な例が、2002年の認定HLA検査技術者及び認定組織適合性指導者認定制度の設立である。本学会では1997年以来DNAタイピングを主体とするQCWSを実施していたこともあり、2000年の鹿児島大会の際に有志が集まって、本学会にも組織適合性に関する技術者や指導者を認定する制度を設置しようとの意見がまとまった。その後、佐田先生が中心となり、実務は小林先生が担当することで、1年ちょっとかけて、現在の認定制度を構築したものである。また、QCWSではDNA-QCと抗体QCが行われているが、前述のように当初はDNA-QCのみが実施されていたところに、佐田先生が大会長を務められた2004年に大会主催で抗体ワークショップを始めたことをきっかけにして、2005年より抗体-QCWSが学会QCWSの正式部門として発足することになった。DNAは室温でも十分安定であるため、標準サンプルとして参加ラボに配布することが比較的簡単であったが、抗体(抗血清)を配布するには、倫理的諸問題や配布方法を含めて、種々の検討が必要であった。しかし、佐田先生はこれらの諸問題を見事にかつ的確に処理されて、QCWSの礎を構築されたものである。

このように佐田先生は、ゴールを明確に見定めて、そこに向かって周囲を巻き込みつつ着実に達成するリーダータイプの人であったが、ご本人が表に出てがむしゃらに進めるのではなく、“遊び”(余裕)を交えて飄々と進められた。照れがあってそのようにふるまわれていたのであろうが、自身のためでなく、皆のためになることとして、私利私欲に走らずに進められた姿は、実に佐田先生らしい姿であったと思う。

公私に渡りお世話になった身として、これからも佐田先生の背中に教えられたことを守って行きたいと思う。佐田先生、大変お世話になりました。心よりご冥福をお祈りします。



写真1

長野オリンピック白馬アルペン会場(八方尾根スキー場)にて
左より、大澤さん、成瀬先生、佐田先生、筆者



写真2

長野オリンピックアルペン会場宿舎にて
左より、成瀬先生、筆者、大澤さん、佐田先生

「佐田正晴先生との思い出」

信州大学医学部第二内科特任教授
太田 正穂

佐田先生：2010年突然の病で倒れてから、リハビリテーションで随分回復なされたとお聞きし、お会い出来ることを期待していたのですが、このような訃報を知るとは思いも寄りませんでした。66才とは余りにも早すぎる旅立ちではないですか。

先生とは、1991年横浜で開催された11th IHWCだったようですが、当時のことは余り記憶にありません。お話をさせて頂いたのは多分私の帰国後、第5回のJSHI（1996年十字先生が開催）で、HLA-DNA タイピングに関する事だったと思います。それ以降、公私共々大変お世話になりました。特に猪子先生、佐田先生、私とは年齢がそれぞれ2才ずつ異なり、兄弟のようなお付き合いをさせて頂きました。また、頻繁に海外での学会（ASHIやEFI）参加に同行させて頂き、発表は勿論、グルメな先生との食事や観光がいまでも鮮明に思い出されます。

佐田先生とは20年程のお付き合いでしたが、学と遊に関しては質が高かったのではないのでしょうか。先生は移植におけるHLAの役割についてオピニオンリーダー的な存在でした。JSHIでは、2003年～2010年にかけて組織適合性認定制度委員会の委員長を歴任なされ、QCWSの礎を築き、世界に誇る質の高い技術者の輩出に御尽力なされたことに感謝いたします。また、先生は2004年（第13回日本組織適合性学会大会）と2008年（第17回日本組織適合性学会大会）の学会を主催し、そのプログラム内容は先生の人脈の広さから盛り沢山で企画に富んでいたのが思い出されます。特に先生が口にしていた「基礎と臨床の協調」が鮮明に表れた学会ではなかったのでしょうか。更に17回の大会では、高原先生が大会長を務めた第44回日本移植学会との共同シンポジウムや相互聴講の企画は、多くの臨床の先生を本学会参加へ導くものでした。また、この大会では先見の明があったのでしょうか、特別講演に2012年ノーベル生理学・医学賞を受賞なされた山中伸弥教授を招き、iPSの御講演を拝聴させて頂いたのには感銘致しました。

さて遊の面ですが、佐田先生は大変ゴルフが好きでした。兎に角、中学生の頃には、プロのレッスンを受けプロゴルファーを目指す程の腕前だったそうです。その面影は私達とのプレー中にも随所に見られ、一味違ったプレーをしておりました。また、冬のスポーツであるスキーも好きなことから、毎年季節を問わず信州を訪れ、御一緒に楽しく遊んで頂いた日々が懐かしく思い出されます。



写真1 11th IHWC (1991年, 横浜)

右より太田, 小林先生, 佐田先生



写真2 25th ASHI (1999年, New Orleans)

右より小幡先生, 猪子先生, 徳永先生, 佐田先生, 太田



写真3 Golf場にて（1999年）

左より佐田先生，成瀬先生，太田

「太く短い」と仰っていた言葉が，まさか現実になるとは夢にも思いませんでした。佐田先生には本当にお世話になりましたが，まだ面と向かってお礼を言ったことがありませんでした。日本組織適合性学会への御尽力と私への多大なる御高配に感謝致します。

先生の御功績に深甚なる敬意を表し，ご冥福を謹んでお祈り申し上げます。

佐田正晴先生の思い出の数々

東京医科歯科大学難治疾患研究所 分子病態分野
成瀬 妙子

初めて先生とお会いしたのは、ずいぶん昔、1990年頃の近畿HLA研究会（現、近畿地方会）だった。毎年2月初旬頃に開催されるこの会に、当時兵庫県赤十字血液センターに入職して半年余りの私は、上司であった能勢義介先生に発表を行うようにと言われ、訳も分からず初めて参加した。会場に到着した時にはすでに口演は始まっていて、ほどなく佐田先生が発表を始めた。この時のことはなぜか鮮明に覚えているが、先生は一際目立っていた。周りのネズミ色のおじさんたちと違い、ブラウンのスエードのジャケットを渋くお洒落に着て、淡々と、時にぼっそとシンプルにプレゼンをされる。しかも内容はヒトではなく、霊長類のMHCタイピングだった。サルのリンパ球を市販のテラサキプレートにあてて血清学的タイピングを行ったというものであった。異分野からこの業界に入った初心者の私は、やっていることの意義がわからず、この先生はヒトの血清でサルのタイピング？発想が斬新やね、結構マトモに反応するなあ！？などと思っていた。現在自分が実験動物サルのMHCを解析していたりすることに不思議なご縁を感じたりする。研究会後の懇親会で佐田先生をご紹介頂きご挨拶をしたが、傍にいた方が「この先生はスキューバダイビングが本職で、海中写真集を出版しているんだ」と教えて下さり、海の話で盛り上がった。素直な私はしばらくの間、本業はプロダイバーだと信じていた。

その後まもなく、近畿HLA研究会の仕事で先生とご一緒させて頂くこととなる。当時はHLA DNAタイピングが日本でも脚光を浴び始めた時期だった。PCR産物を用いたDNAタイピングは、血清学的タイピングに変わる画期的、高精度な検査方法として注目されていたが、国内ではまだ一部の大学レベルでの話で、関西方面ではまだどこも導入していなかった。佐田先生はDNAタイピングの重要性にいち早く着目し、病院などの組織適合性検査室への導入、普及を行うために研究会内にワーキンググループの立ち上げをされた。その頃私は、ご縁を頂き東海大学の猪子英俊先生のとこにHLA-DPB1アレルのタイピングやサンガー法による塩基配列決定などを頻繁に習いに行っていたこともあり、ワーキンググループでの講習会や講演会、ワークショップなどの実行をお手伝いさせて頂くこととなった。

こうしてお仕事をさせて頂くうちに、私は佐田先生のパーソナリティーを間近で知ることができた。

佐田先生は筋の通らぬこと、義を欠く者には大変厳しい一方、人情厚く、腹を割って話し合い、理解し合えたならば過去は引きずらない。たとえば、DNAタイピング法導入で先生がこだわったのは、放射性同位元素（RI）を使用しないということであった。初期のDNAタイピングは³²Pなどを使用して行うPCR-SSOP（sequence specific oligonucleotide probe）が主流で、非RI標識の試薬もあったものの感度が劣り、RI使用が一般的と言われていた。しかし、先生はRI使用は一般の病院検査室に不向きであるということの他に、「非核」の信念をお持ちだった。「汚染ゴミはタンクに溜めるだけで処理の仕方も見つからない、そんなものを研究の名のものに使うなど、自分の尻を自分で拭けない者は最低だ。研究者ならそれに代わるものを見つけて努力すべし」と、口癖のように言われていた。当時当然のようにRIを使って塩基配列決定をしていた私は大いに反省した。以来、RI室には出入りしていない。

佐田先生は酒と煙草をこよなく愛された。学会や会議の後は皆で飲食に繰り出し歓談することを好まれたが、必ずマイ灰皿を携帯され、風下に位置されていた。そして、ご一緒したときにいつも驚くのが、その見識の広さである。硬軟取り混ぜ、豊富な話題で皆を飽きさせない。先生は故郷の海（の幸）を愛する本物の湘南ボーイなので、関東弁の静かな物腰と見せかけ、しかしポンポンしゃべる。どんなに俗っぽいことをおっしゃっても、お育ちの良さから時折のぞく品格がそれを打ち消す、不思議な魅力があった。また、意外にも？スタジオジブリのアニメキャラクターがお好きで、「トロロいんだよねー」とトークを展開されていた。お茶目さんである。とは言え、必ず最後はHLA関連の話になっていたことを考えると、HLAはやはり先生のライフワークだったのであろう。



写真1

1996年フランスで開催された第12回国際HLA学会。サン・マロでのワークショップの後にパリで行われた船上パンケットで、筆者と。十字猛夫先生が撮影、提供して下さいました。



写真2

ゴルフ場にて。佐田先生、太田正穂先生と。

佐田先生との交流は私が東海大へ移ってからも続き、海外の学会などではタイ、フランス、アメリカなど、よくご一緒させて頂いた（写真1）。海外では学会の合間に観光や食事をご一緒させて頂いたが、服装やマナーはいつも各国の習慣を考慮され、相手に不快感を与えない、さりげない大人の立ち居振る舞いをされていた。特に欧米では、ホテルやレストランは勿論、至る所でいつもレディーファースト、スマートなエスコートをして下さったのが印象深い。また、2003年、私が大阪市立大学大学院で博士（医学）の学位を授与され、猪子先生がお祝い会を開いて下さった時には、わざわざ大阪より駆けつけて下さった。実はこの時期、私は第7回アジアオセアニアワークショップの幹事を拝命し、初めての国際学会幹事という慣れない仕事に大変なプレッシャーを抱えていた。佐田先生にも多々ご相談させて頂いたが、幾度となくお励ましを頂き、携帯電話の電池が切れるほどお話し頂いたことも幾度かあった。こうしたさりげないやさしさが、とても身にしみたものである。

プライベートでは佐田先生のゴルフ好きは有名で、私もよくご教授頂いた（写真2）。女だからと短い距離でスコアを競うのは不公平と思われるからレギュラーティーで回るようにと言われ一緒にラウンドさせて頂いていたが、本当は私だけが一人離れたレディースティーで疎外感を味わわぬように、との佐田先生の思いやりだった。佐田先生はゴルフでの武勇伝にも事欠かなかった。ある時、混雑のためコース上で打順を待っていたのだが、後ろの組からボールが打ち込まれ、フェアウェイに立っていた私のすぐ側に飛んできた。難を逃れ驚いた私が後ろを振り向くと、近くに居た佐田先生が消えていた。そしてアイアンクラブを握り後ろの組に突撃して行く姿を確認し、一時はみんなでドキドキしたが、その後はとても紳士的に収まった。また、先生はグルメでもあったので、ゴルフの前後にはよく美味探検に向かったが、時にはコテージなどへ自ら食材を持参して、手料理を皆にふるまわれていたことも良き思い出である。

佐田先生は本学会においても2度の大会長を務められたが、その他に今やすっかり定着した認定制度委員会の、初代委員長としても長年ご尽力された。組織適合性に関わる人々を目に見える形で認定し、HLAオタクという周囲の認識からの脱却を図った。技術者や指導者がHLAスペシャリストとして広く認知されることを願って、委員会の立ち上げ、基準作りや制度の確立、また移植学会とのパイプ役としても活躍された。その根底にあったのは、先生のこんな信念だった。「50歳を過ぎたら前に出ず、世のために人を育てる」。認定制度は今年新たな扉が開かれ、設立時よりの懸案であった、施設認定がスタートする。空から行く末を見守って頂きたい。

晩年は直接お会いすることは叶わなかったが、佐田先生は最期まで信念を曲げず、ダンディズムを貫き通して旅立たれた。何一つご恩をお返しできなかったが、佐田先生から学んだ、人としての大切な教えを胸に刻み、日々精進するのみである。

ご冥福を心からお祈り致します。

佐田正晴先生への寄稿文

大阪大学医学系研究科先端移植基盤医療学寄附講座 教授
高原 史郎

とにかくユニーク、というか不思議な人でした。

私は臓器移植という社会性の高い医療に従事していますので多種多様な人々との交流があります。医学、医療、エンジニアリング、コンピューター・サイエンス、行政から立法・法曹界、音楽、アート、そして外国の人々。しかし彼はどの範疇にも入らない。

佐田正晴という人はあえて言えば「バイオメディカルを専門とする研究者」です。それは間違いありません。しかしそれでは彼の人の30%くらいしか説明できない。

彼は私の人生の何度かの転機で大きな影響を及ぼしました。私は別に彼に意見を求めたわけではありません。単なる雑談の相手です。しかし彼の一言が私の決定に大きな後押しとなりました。少なくとも2回、そのようなことがありました。今回、この寄稿文を書くことになり、彼との長い付き合いでの印象に残ったことを整理するという作業で改めて認識しました。

もう一度私なりに佐田正晴とはいかなる人物か？よく考えてみました。はっきりしていることは「観察力を通してその人がなすべきこと、その人がその時点で気が付いていない将来の目標」を提示する能力に長けていたことです。

一つだけ具体例を示します。2011年9月、私は日本移植学会理事長に名乗りを上げるか？かなり迷っていました。なりたくない理由がいくつもありました。その頃、何度か彼と雑談する機会があり、もちろん私はこの話題には触れていません。それまでも彼とはこのような人事の話は一度もしたことがありませんでした。しかしある時彼が、「今、お前が理事長をやらないとどのような不都合が起こるか？」を様々な具体例を示し、かつ考えうるいくつかの代案の長所短所を、これも具体的に挙げ、それらの結果がどのような事態を引き起こすか、淡々と話しました。私は決心しました。

いま、私の前に彼はいません。しかし、「彼ならこのように考えるのではないか？」「彼ならこちらを選ぶであろう」と想像することはできます。彼は私の中でまちがいに生きています。